

埼玉医科大学神経内科 教授 荒木信夫
Nobuo Araki

片頭痛の病態生理については、従来からさまざまな検討がなされている。1980年以前は vascular theory (血管説) が主流で、前兆の時期に血管が収縮し、その収縮が長く続かず、拡張に転じると頭痛が起こってくるという考え方であった。しかし、デンマークの Olesen らが、脳血流を連続的に測定してみると、頭痛は脳血流が低下している状態ですでに始まっていることを見出したため、「脳血管の拡張」=「頭痛」という考え方は誤りであると主張した。彼らは SPECT での脳血流の変化の観察により後頭葉から前に向かって進む皮質拡延性抑制 (cortical spreading depression ; CSD) という現象が起こり、これが片頭痛の最初に起こる変化ではない

かという説を打ち出した。頭痛に関しては、脳血管の周囲にある三叉神経が関与しているという三叉神経血管説で説明している。しかし、脳自体に起こる変化が先か、血管に起こる変化が先かの議論は、いまだ決着していない。4年前になるが、ベルリンでの国際頭痛学会 2011 で、血管説と CSD 説のどちらの説を支持するかというディベートの際に、参加者は約半数ずつに割れた。筆者は会場で参加者からどよめきが起こったことを鮮明に記憶している。片頭痛の病態解明が進むなかであっても、この問題は古くて新しい問題といえる。そこで、今回は片頭痛の病態生理に精通しているお2人の先生方にディベートをお願いした。

※本企画はテーマに対して、あえて一方の見地に立った場合の議論であり、必ずしも論者自身の確定した意見ではありません。

CSD が主体である

北里大学医学部神経内科学 講師 増田 励
Ray Masuda

サマリー

1944年に Leão が報告した皮質拡延性抑制 (cortical spreading depression ; CSD) は、片頭痛に密接に関係すると考えられているが、CSD が片頭痛の本体か否かという点に関しては結論が出ていない。その理由として、CSD 後に頭痛を生じる機序が確立していないことが挙げられる。

従来提唱されていた CSD 後の血管拡張や炎症性メディエーターの放出のみでは、実際の片頭痛発作の痛み の出現や継時的変化を説明しきれなかったが、近年の研

究報告ではこれらの問題点が解決されつつある。CSD と片頭痛の関連性に関しては、いまだ解決されていない問題もあるが、本稿では未解決な疑問に対する仮説も含め、片頭痛の発症機序における CSD の役割を解説する。

はじめに

1944年に Leão が報告した皮質拡延性抑制 (cortical spreading depression ; CSD) は、翌年には Leão 自身により片頭痛との類似性を指摘されていた¹⁾。1990年代に CSD と片頭痛前兆の際にみられる spreading